

〈特集 新型コロナウイルス感染拡大と演劇上演〉

上演活動報告

## 『イグレーヌ・バリエーション』

～コロナ・ウイルス感染下に、私たちはいかに『タンタジールの死』を読むか？～

(2021年2月27日14時/28日14時 京都芸術センター・講堂)

横田 宇雄

原作：モーリス・メーテルランク『タンタジールの死』

訳：出演者による創作

出演：前田愛美、三鬼春奈、山野博生（A級欠番）、渡辺健一郎

翻訳原案・構成：よこたかお（BARACKE）

中堀徹（音楽）、川島玲子（照明プラン）、吉村聡浩（舞台）、北川啓太（写真）、chanmi（フライヤー）

主催：若手演劇人のための研究と創作の場－BARACKE－

共催：京都芸術センター、京都芸術センターCo-program 2020 カテゴリーD「KAC セレクション」採択企画

2021年2月、京都芸術センターにてモーリス・メーテルランク『タンタジールの死』を原作にした上演作品を発表したので、その経緯及び概要を報告する。

企画は、抜粋上演である『タンタジールの死』（2018年11月26日、主催・会場：UrBANGUILD、出演：弓井茉那、演出：和田ながら、上演台本：横田宇雄）に端を発する。長年、メーテルランクの翻訳に取り組みたいと思っていた私は、様々なきっかけから、演出家の和田ながら氏に誘われて、この芝居に取り組むことになった。

抜粋上演から半年後、私は自宅にある深さ十五メートルの古井戸に転落し、大けがを負い、三カ月間入院することになった。その入院期間中に『タンタジールの死』の翻訳を仕上げた。このとき翻訳した『タンタジールの死』のリーディング公演を2020年に行った（2020年1月25-26日、会場：Social Kitchen、構成：横田宇雄、出演：楠毅一朗、楠海緒、前田愛美、渡辺健一郎、作曲：中堀徹、主催：BARACKE）。このプロダクションは京都芸術センターのカテゴリーDプログラムに選ばれ、2021年に完全版が上演されることになった。

ご存じの通り、『タンタジールの死』は既に多くの演出家によって上演されてきた「古典」であるが、「人

形のためのドラマ」と題されているにもかかわらず、この戯曲は俳優によって演じられてきた。このパラドクスは創作の源泉ともいえるもので、人形劇のテキストをいかに俳優が演じるか、という点において解釈・読解の豊かさを与えてくれる。

私がこの戯曲を翻訳したいと思ったのは、未刊行ではあるが既に優れたメーテルランク戯曲の新邦訳が近年生まれ、上演されたからだ。『室内(Intérieur)』が2013年に横山義志氏によって、『盲点たち(Les aveugles)』が2015年に平野暁人氏によって邦訳され、SPACが上演している。幸運なことに、この二作の上演当時、私はSPACのスタッフとしてこれらの作品の制作に関わる機会を得た(『室内』は2015年の再演時)。これが自分もメーテルランク戯曲を邦訳したいと思った大きな動機である。

翻訳においては、クロード・レジの演出観を参考にした。音の数を減らし、語の意味を確定せず、なるべくフランス語の語順に従った訳を作った。日本語として違和感を覚える箇所もあろうが、俳優が演じてみるとそうした違和感もなく、イメージの連鎖とでも言えば良いだろうか、まるでフランス語を聞いているかのように日本語が聞こえてくるように意識して翻訳を行った。

こうした翻訳に関する私見は拙稿「クロード・レジ著作の翻訳について」(『身体表象(第一号)』、73-82頁、2018年5月、学習院大学身体表象文化学会)に書かせていただいた。ご覧いただきたい。

新型コロナウイルス感染拡大という未曾有の事態においての上演であったので、実務的な点についても記録を残しておきたい。

京都芸術センターの共催事業であることもあり、上演自体は既に2019年の秋ごろには決まっていた。しかし2020年の春に緊急事態宣言が発令される。集会することが禁止され、インターネットサービスを活用して、各自が自宅から参加する遠隔での稽古の方法を模索するところから始めなくてはならなかった。端的に言って、リモートでの稽古は、うまくいかなかった。2秒の遅延のために、コミュニケーションの質が致命的に落ちてしまい、そのずれのなかで演技を合わせるということは、我々には最後までできなかった。

コロナウイルス感染対策の方針が定められてから、同方針を守るための新演出プランを考えた。客席を間引き、客席の間に仕切りを設け、舞台と客席の間を二メートル空けた。私はこれを一過性の環境だと考えたくなかった。むしろ、こうした制限により創造環境に何かしらの潜在的な可能性がもたらされると考え、マイクによる肉声の拡声に重きを置いた演出法を取り入れた。観客はまるで個室の中で、遠くにあるぼんやりとした像を見ながら、背後から声を聴くといった演出にした。私としてはリチャード・フォアマンを意識したつもりである。

コロナ禍における劇場の客席統制は、恐らくは劇場史に残る出来事であると思う。例えば18世紀のフランスでは劇場が演劇上演のための専用施設として整備された経緯に観客を管理する(防災、暴動阻止など)ことが要請されていたことを思い出されたい。今回の緊急事態宣言の時短営業協力要請施設の中に「劇場」が含まれていたため、上演に際しては一定の感染防止対策を行うことが要請された。

当然私たちの公演も要請された基準を満たすため、専門家によるヒアリング、劇場との打ち合わせを綿密に行い、コロナ禍を逆手にとった新演出を創案するなど、できる対策を全て行った。しかし二回予定されていた夜公演は全て中止になった。2021年2月7日に再発令された緊急事態宣言が、3月7日まで延長されたからだ。基準を満たした感染防止対策を行い公演の準備を進めていたにも関わらず、緊急事態宣言が出ればそれに従わざるを得ない。むなしい気持ちになった。

また、文化庁が実演家向けに整備した「文化芸術活動の継続支援事業」も、事態を混乱させた。もちろん、この補助金がなければしっかりとしたプロダクションを組むことはできなかった。しかしこの補助金の申請にあたっては何度にもわたる修正依頼に応えなくてはならず、結局、予算が執行できるかどうかの回答が得られないうちに本番を迎えてしまった。この補助金は公演の赤字を前提としていて、実演家にとって使い勝手の良い補助金であるとは必ずしも言えなかった。



(写真：場当たりでの様子)

今回の翻訳は、私が逐語訳を作成し、俳優はその逐語訳を通じて内容を理解をした上で、辞書を引きながら、フランス語原文にあたり、言葉を選択しながら共同で翻訳を進めていった。必ずしも全員がフランス語を理解するわけではなく、この方法には時間はかかったが、うまくいった。このやり方が戯曲翻訳の世界に、何か新しい一助となることを願いたい。

最後に参加俳優の前田愛美からのコメントを下記に掲載したいと思う。

『イグレース・バリエーション』の公演が終わり、『タンタジュールの死』の翻訳と創作に区切りがついた。この取り組みには、翻訳、台本作り、多重録音作業、仲間との創作、劇場入り、本番…と、様々な段階があった。翻訳ワークショップ序盤のある時、文法が複雑過ぎて、文章にできないものがあった。けれど、私の中には文法解説や言葉の意味が散らばっていて、「分かる」感覚があった。文章にできなくても分かっていたりするんだ！と、後まで印象に残った。

台本が確定を迎えるまで、翻訳を重ねていくのが、とても楽しかった。体感する位置を変えると別の訳が生まれる。辞書で確認したどの訳語を選ぶか。また、音声によっても自ずから感じるものは変わった。自分の内部の誤訳の動きを、面白く感じていた。ある時期にしか聞こえない、音のあり方もある。空耳。既知の言葉にはめる、イメージする、取り込み作用。音をフランス語として聞ける時には、空耳は出来なくなった。聞こえなくなるものを、今、駆け足で体験している。

転換は、作品として作り始める時だった。それまで自分の体験と共にあった作業・発見が、一つの「方法」のビジョンのもと、動くことになる。進化に省略記号が挟まれた気がした。ここからは、演劇作りの葛藤が始まる。(その「方法」自体をもっと愛を持って見つめられた気もする。どうして、そうしてみたか? 検討する間もなく、少し焦ってしまった)。

劇場でスタジオ稽古した時、言葉が違う風に発されだした。舞台に立つ。色んな不満を返してしまうような力。シーンをどう作ろうか困った時に、翻訳に戻ってきた。かつての、誤訳、こうも訳せることに気づく。分岐点と筋道。

本番を迎え、観客の目の前に、迎えるよう言葉とあり方が変容する。ここがどんな場所であるかが、やっとはっきりしていく。言葉の聞こえ方(と周りにいる人)について、考えた一年だった。

【横田宇雄 (よこた・たかお)】

翻訳家・舞台技術者。舞台芸術を研究する「BARACKE」主宰。パリ第十大学演劇学修士。専門は18世紀フランス劇場史。2020年よりヴィラ九条山に勤務。京都市在住。